江戸後期から明治20年代までの＜見る＞の尊敬表現
―「ごろうじる」系を中心に―

山　田　里　奈

1．はじめに

「ごろうじる」は，サ変動詞「ごろうず[(1)]」が上一段活用に変化した語である。『日本国語大辞典第二版』には，『玉塵抄』（1563）の例が初出例として挙げられているが，その例は連用形「ごろうじ(て)」の例であるため，上一段活用の確例にはならない。上一段活用の例は，次の1797年の例あたりが早いものとなる。（下線は山田によるもの）

（例1）わしの所は御覧（ゴラウ）じる通り，馬部屋を見るやうな家でござりますが（『歌舞伎・関取菖蒲絹』四幕）

この語は，「見る」の意味を表すが（以下，「見る」という意味を示す場合を＜見る＞とし，語形そのものを示す場合と区別する），江戸後期に用いられた＜見る＞の尊敬表現は，「ごろうじる」「お見なさる」「ごらんなさる」の3種類あった[(2)]。これら3種類の表現は，江戸語（町人男性語の対称用法に限る）の待遇表現を体系表として示した山崎久之（1966）によると[(3)]，いずれも同じように「ます」が下接すると「第一段階（最高敬語）」，「ます」なしでは「第二段階（普通敬語）A晴のことば」に属している[(4)]。しかし，それぞれの使用実態は不明のままである。

そこで，本稿では，＜見る＞の尊敬表現について，特に江戸後期における「ごろうじる」の使用実態を考察し，明治20年代（以下，「明治」）までの変遷について明らかにする[(5)]。

具体的には，以下の2点を述べる。

①高い敬意を表す＜見る＞の尊敬表現として，「ごろうします」が一般的に用いられていたこと。

②単独の「ごろうじる」は，「ごろうします」と比較して，古い表現，堅い表現という特徴を持った表現であり，これが「ごろうじる」系衰退の要因の一つとして働いたこと。

2．調査方法

山崎（1966）は，「対応語発見」と「表現文脈より捕える方法」により，詳細な分析・考察をしている。この方法は，客観的に対称の待遇表現の待遇価値を捉えることができるが，身分による上下関係という外的条件や話し手の階層による表現選択の相違という点[(6)]は，一枚の体系表では表しきれないと思われる[(7)]。そこで，本稿ではその点を明らかにするため，階層ごとの体系表を作成し，用例数も示しつつ考察を進める。詳細は以下の通りである。

・階層を中流以上の人々，下層の人々，芸妓（遣手，禿も含む）に分け，それぞれの待遇表現の体系表を作成し，比較する。各階層の詳細は，山田（2012）に示している。
・体系表中の縦軸となる上下関係は，下→上のAの関係，上→下のCの関係（主従関係，身分差），対等のBの関係（身分差なし）に分類する 。用例にはA，B，Cと記す。なお，親疎関係によって，単なる上下関係では判断できない例は，適宜説明を加えることとする。
・聞き手に対して用いる(8)＜見る＞の待遇表現（命令表現（肯定・否定）を含む）の用例を収集するが，今回は，「ごろうじる」と似た敬意を表す尊敬表現を中心に扱うため，通常語や軽卑語は除く。なお，補助動詞＜てみる＞の用例は表中（　）で内訳を示す。
・用例には，（話し手→聞き手）【上下関係】［『資料の略称』巻，頁］と示す。表す敬意について判断するために留意した箇所（対称代名詞や呼称等）には点線を付す。
・次の例は，表中「ごろうじる～ます」と示した。山崎（1966）において「第一段階」に所属する「くださいます」の命令形「くださいまし」が下接しているため，単独の「ごろうじる」とは表す敬意が異なると考えられるためである。

（例2）まづごろうじて下さいまし。（見知らぬ人→中流以上お絹）【A】［『毬』初編巻之下46］

・「ごろうじます」「ごろうじる～ます」「ごろうじる」を合わせて述べる場合，「ごろうじる」系と呼ぶ。その他の表現も同様である。
・対等のBの関係以上で用いる表現を高い敬意を表す尊敬表現であると認める。命令形，命令形以外ともに上→下のC関係で用いられるようになった表現は，表す敬意が下がったと判断する。
・江戸後期の資料（洒落本，滑稽本，人情本）から明治20年代までの資料を扱う。各資料の詳細は最後の頁にまとめた。下線部を省略形とし用例には下線部のみを記す。

3．江戸後期の使用

江戸後期において使用された＜見る＞の尊敬表現をまとめた表が【表1～3】である。以下，詳しく見ていくために，表す敬意が異なる「ごろうじます」と「ごろうじる」を分けて述べる。

3.1 「ごろうじます」の使用実態

「ごろうじます」が，高い敬意を表す尊敬表現であることは，山崎（1966）が述べている。表を見ると，すべての階層が，対等のBの関係（以下，単にBとだけ記す。A，Cも同様）以上で用いており，今回の調査範囲においても同じような結果を得られたといえる。さらに，「ごろうじます」が「尊敬動詞＋ます」の形を有する表現として，最も一般的に用いられたこともわかる（【表1】30例，【表2】6例，【表3】4例，計40例と多用(9)）。これと似た分布を示し，「ます」を下接する表現には，「ごらんなさいます」があるが，これは3例のみ（【表1】2例，【表3】1例）であることから，「ごろうじます」との勢力の違いを指摘することができる。ただし，表す敬意はほとんど変わらない。次の例3，4は，女学者のけり子と鴨子の会話である。対称代名詞「あなた」「おまへさん」や「お詠（よみ）なさる

表1　中流以上の人々の使用

表　現	上下関係	A				B				C				計			
	話し手の性別	男性		女性		男性		女性		男性		女性		男性	女性	計	%
	内訳＼聞き手の性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性				
ごらんあそばす	命令形							1(0)						0(0)	1(0)	1(0)	0.5%
ごらんなさいます	命令形					1(0)			1(0)					1(0)	1(0)	2(0)	1.1%
ごらんなさる～ます	命令形以外	1(0)												1(0)	0(0)	1(0)	0.5%
ごらんなさる	命令形以外					1(0)		2(1)						1(0)	2(1)	22(13)	12.0%
	命令形	1(1)	2(1)	2(1)		4(3)	3(2)	4(1)	3(2)					10(7)	9(5)		
ごろうじます	命令形以外	1(0)		1(0)					2(0)					1(0)	3(0)	30(15)	16.4%
	命令形	2(2)		3(3)	3(2)	7(2)	4(4)	2(1)	5(1)					13(8)	13(7)		
ごろうじる～ます	命令形以外		1(0)											1(0)	0(0)	1(0)	0.5%
ごろうじる	命令形以外	1(0)				1(0)	2(0)	1(0)	1(0)					4(0)	2(0)	27(10)	14.8%
	命令形					14(6)	2(2)			4(2)	1(0)			21(10)	0(0)		
お見なさる	命令形以外							2(1)						0(0)	2(1)	6(5)	3.3%
	命令形							4(4)						0(0)	4(4)		
見なさる	命令形以外					3(0)								3(0)	0(0)	43(23)	23.5%
	命令形					21(8)	5(3)			9(8)	4(4)		1(0)	39(23)	1(0)		
見さっしった(て)	命令形					21(9)				1(0)	1(1)			23(10)	0(0)	23(10)	12.6%
見さっしゃる	命令形												1(0)	0(0)	1(0)	1(0)	0.5%
見たまふ	命令形					1(0)								1(0)	0(0)	1(0)	0.5%
お見	命令形						1(0)	1(0)	3(1)		1(0)		1(0)	2(0)	5(1)	7(1)	3.8%
ごらんだ	命令形以外								2(0)					0(0)	2(0)	2(0)	1.1%
ごらん	命令形						1(0)	2(2)	11(6)		1(1)		1(0)	2(1)	14(8)	16(9)	8.7%
合　計		6(3)	3(1)	6(4)	3(2)	74(28)	18(11)	19(10)	28(10)	14(10)	8(6)	0(0)	4(0)	123(59)	60(27)	183(86)	100.0%

表２　下層の人々の使用

表　現	上下関係	A				B				C				計			
	話し手の性別	男性		女性		男性		女性		男性		女性		男性	女性	計	%
	内訳＼聞き手の性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性				
ごらんあそばす	命令形				1(0)									0(0)	1(0)	1(0)	4.3%
ごろうじます	命令形以外	1(0)												1(0)	0(0)	6(3)	26.1%
	命令形	1(0)	1(1)	1(0)	2(2)									2(1)	3(2)		
ごろうじる	命令形以外			1(0)										0(0)	1(0)	4(2)	17.4%
	命令形					2(1)			1(1)					2(1)	1(1)		
見なさる	命令形以外					1(0)								1(0)	0(0)	7(0)	30.4%
	命令形					2(0)			4(0)					2(0)	4(0)		
見さっしった(て)	命令形					3(2)				1(1)				4(3)	0(0)	4(3)	17.4%
お見	命令形								1(0)					0(0)	1(0)	1(0)	4.3%
合計		2(0)	1(1)	2(0)	3(2)	8(3)	0(0)	0(0)	6(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	12(5)	11(3)	23(8)	100.0%

表３　芸妓の使用

表　現	上下関係	A		B		C		計	%
	話し手の性別	女性		女性		女性			
	内訳＼聞き手の性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性		
ごらんなさいます	ごらんなんす(命令形)		1(1)					1(1)	1.4%
ごろうじます	命令形	2(1)			2(1)			4(2)	5.6%
お見なさいます	お見なます(命令形)	1(0)			3(3)			4(3)	5.6%
	お見なんす(命令形)				2(2)			2(2)	2.8%
お見なさる	命令形以外	1(0)						9(5)	12.7%
	命令形	5(3)			3(2)				
見なさいます	見なんす(命令形以外)	3(0)	2(0)					24(7)	33.8%
	見なんす(命令形)	14(5)	5(2)						
	見なます(命令形)	5(1)	4(1)		2(0)		2(1)	13(3)	18.3%
見なさる	命令形	3(0)						3(0)	4.2%
見さっしった(て)	命令形以外				2(0)			2(0)	2.8%
お見	命令形			2(0)	1(0)			3(0)	4.2%
ごらん	命令形	1(1)	1(1)	3(0)	1(1)			6(3)	8.5%
合計		35(11)	13(5)	5(0)	16(9)	0(0)	2(1)	71(26)	100.0%

A（下→上のAの関係），B（対等のBの関係），C（上→下のCの関係）
（　）は，補助動詞「てみる」の用例数の内訳を示している。
表中「%」欄は，各表現の用例数を階層内の全用例数で割り，少数第二位で四捨五入した数値である。

さうでござります」「お這入なさりますか」など，互いに尊敬表現を用い，丁寧な言葉遣いをする中で，両表現が用いられている。

（例3）此間は何を御覧じます。（女学者けり子→女学者鴨子）【B】［『風』三編巻之下197］

（例4）いへもうおゆるりと御覧なさりませ。（女学者鴨子→女学者けり子）【B】［『風』三編巻之下198］

以下，「ごろうじます」について，用例を示しつつその使用を見ていく。

3.1.1　下→上のAの関係

まず，Aであるが，次の例5は，下男の理介から主人のお熊に対して用いた例である。

（例5）たとへあの旦那が伊勢本にお在なさるにもしろ，お前さんが其様に軽々しくお出なさるといふことがあるものでござゐますか。よくお考なすつて御覧じまし。（下男理介→主人お熊）【A】［『告』第四編第二十三章545］

今挙げた例は命令形で用いた例であるが，中流以上の人々の使用には，命令形以外の例も見られた。次の例6は，茶屋の主人から客の金五郎に対して用いた例である。

（例6）モシ旦那，額重の小さんをごろうじましたか（茶屋の主人→客の金五郎）【A】［『娘』38］

従って，例5，6いずれの場合も高い敬意を表していることがわかる。

3.1.2　対等のBの関係

次に，Bであるが，中流以上の人々の使用と芸妓の使用を見ることができた。命令形以外で用いる例が，中流以上の人々の使用に2例見られたが，2例とも例3，4で挙げた女学者の鴨子とけり子による使用であった。以下，命令形で用いる例について階層ごとに見ていく。

①芸妓の使用　芸妓の使用では，「ごろうじやす」と「ごろうじいす」を互いに用いている。

（例7）此子を御覧じいし。ゆふべ寝ぼけて，ながしへおちて，此疵をつけいした。（芸妓およし→芸妓お仲）【B】［『古』89］

この例は，本文中「おなじ河竹の末葉とて，合借家同士の心安さ。」という説明から，遊女あがりであり，特に，話し手のおよしは，「まだ里言葉（底本注：廓独特の言葉づかい）の折ふし雑もおかしかりき」とあるように，遊里の言葉が残っている。話の内容も廓内の出来事であるため，裏借家に住んでいるが下層町人同士の会話とは様相を異にしていると考え，芸妓の使用例として扱った。

②中流以上の人々の使用[10]　Bといっても，待遇表現の選択には年齢による上下関係や場面，聞き手の性別なども影響を与える。そこで，ここでは聞き手の性別を考慮して考察を行う。なお，命令形に限定するのは，命令形以外の用例が少なかったという消極的な理由によるが，命令形の例が多いというのは，＜見る＞の尊敬表現に現れる特徴でもある。以下，それぞれ詳しく見ていく。

ⅰ　同性　まず，男性同士7例，女性同士5例について見ると，いずれも言葉遣いが丁寧な人物が使用している。次の例8は「言葉遣いがはなはだ丁寧」である中流以上のお俳助から中流以上のやみ吉に対して，例9は，中流以上の町人女性おたこからおいかに対して用いた例である。例8は命令の用法であり，例9は「……てごらんなさい。そうすると」という仮定的な用法である。例9のように聞

き手に直接はたらきかける用法ではなくても，丁寧な言葉遣いで話す場合に用いる[11]。

（例8）どういたしておまへさん。アハヽヽヽヽ。イヤモシ，御覧じまし。此まづ糠をおこぼしなすつた事は，これもおありがたいお米から分身いたしたものでござります。（言葉遣いがはなはだ丁寧な町人男性お俳助→中流以上やみ吉）【B】［『風』四編巻之下275］

（例9）それはその筈さおまへさん。是でもネ，最半年も立て御覧じまし。大きにおせ話が薄らぎますよ。（中流以上おいか→中流以上おたこ）【B】［『風』三編巻之下186］

ただし「ごろうじやし」となると「はなはだ丁寧な言葉遣い」というわけではなくなる[12]。

（例10）そんなら與一兵衛の出の處から，自身に本を読でごろうじやし，それで筋がわかる。（中流以上出目助→中流以上左次郎）【B】［『八』四編追加上之巻238］

この例10の話し手と聞き手には，広瀬満希子（1998）が「八笑人の面々は親しい友人関係にあるが，そのなかで〔左次〕はリーダー的な存在であり，＜中略＞上下の関係があると見るべき（P.182）」と述べるように，Bの中でも上下関係が認められる。この2人の他の会話では，互いに通常語や対称代名詞「おめへ」を用いることから，「ごろうじやし」も高い敬意を表す表現として用いられているわけではないが，左次郎が出目助に対して用いる例は見られなかった。

ⅱ　女性から男性に対して　女性から男性に対して用いる例（2例）も，丁寧な言葉遣いをする人物によって使用されている。次の例11は，母親が息子の友達に対して用いた例である。

（例11）あれごろふじまし。わたくしにはちつとも口はあかせません。（中流以上の町人卒八の母親→卒八の友達）【B】［『八』第三編追加上168］

女性から男性に対して用いる他の表現は，「お見なさい」や「ごらんなさい」であった。次の例12は，命令形ではないが，中流以上のお政から金之助に対して「お見なさる」を，例13は同じ人物間で命令形「ごらんなさい」を用いている。

（例12）ハイ只今帰りました。何ぞ給てお見なすつたか。（中流以上お政→中流以上金之助）【B】［『清』第十二回626］

（例13）アレ御覧なさい。此頃は大造人が出て参りました。（中流以上お政→中流以上金之助）【B】［『清』第一回532］

ⅲ　男性から女性に対して　次に，男性から女性に対して用いる例についてであるが，4例中3例が，次の例14の人間関係で用いられていた。これらの例は，山崎（1966）が最初は「おめへ」と「～なさる」であったが「インテリぶ」って「おまへ」と「お～なさる」「ごろうじる」「ごろうじませ」を用いるようになった例として挙げている。

（例14）ハテおまへ考へて御覧じませ，文字を教へたばかりか，三百六十日夜の明けるをしらせるは誰だ。ソレお考へなさい，烏か，烏より早く教へるは鶏でございませう。（「人に遊ばされそうなる人」と説明される中流以上男性→中流以上お文）【B】［『癖』三編323］

確かに，先に挙げた例3でも，命令形以外の例ではあるが女学者が用いており，教養のある人物が用いる表現という共通した性格を指摘することができる。ただし，「ませ」という古い形を用いる点

が教養ある人物というニュアンスを持たせているとも考えられ，「ませ」について考察する必要があるだろう。

男性から女性に対して用いる他の表現は，「見なせへ」や通常語であった。次の例15は，前述の例12，13と同じ人間関係であるが，これらと比較すると，女性から男性に対して用いる表現とは異なることがわかる。

（例15）左様して見れば些もはやく。歸つたが宜らうと。是こゝにお文がある。マア篤くりと見なせへ。（中流以上金之助→中流以上お政）【B】［『清』第二十四回676］

また，「ごらんなせへ」は，例16のように，垣根越しで，道を尋ねる場面（本来は夫婦だがここでは他人同士）で用いられていたため，例15よりも改まったときに用いるといえる。

（例16）今も申通り私もこの頃爰へ来て何にも様子はしりませんから外で聞て御覧なせへ。（中流以上与四郎→中流以上お重〔お重の夢の中での会話〕【B・疎】［『恋』二編巻之中56］

3.2　単独の「ごろうじる」[13]の使用

単独の「ごろうじる」は，「はじめに」で述べたように，「ます」を下接しない形で，「第二段階（普通敬語）」に用いるとされている。以下，命令形以外と命令形に分けて考察する。

3.2.1　命令形以外の場合

命令形以外の例は，下層の人々の使用がA，中流以上の人々の使用がAとBで例が見られた[14]。まず，Aの使用についてであるが，例17は，金五郎の息子の子守であるお澤から主人の金五郎に対して，例18は，大黒屋の主人から客である米次郎に対して用いた例である。

（例17）早くこのお文を御覧じて[15]。（下層お澤→中流以上金五郎）【A】［『清』第二十回659］

（例18）何なら鳥度御覧じて一筆御返翰を。（大黒屋の主人→中流以上客の米次郎）【A】［『閑』第三回696］

次にBの使用についてであるが，次の例19は，前述した例14の「インテリぶる」人物の例以外に，中流以上の町人男性，他右衛門の例が見られた。ただし，この人物は，本文中「ござりますといふべきをごぜすと約めていふくちくせなり」[16]と説明があり，特徴を持つ人物といえる。

（例19）御覧じたか。どうでごぜせう。（中流以上他右衛門→自六）【B】［『癖』三編291］

3.2.2　命令形の場合

命令形の場合，Aの使用は見られなかった。以下，B，Cの使用について見ていく。

（1）対等のBの関係

Bで用いる例は，中流以上の人々の使用に16例，下層の人々の使用に3例見られた。以下，階層ごとに見ていく。

①中流以上の人々の使用　まず，中流以上の人々の使用についてであるが，慣用的に用いられた例，口上の口真似で用いられた例が5例見られた。以下，例20は香具師の口上の口真似，例21は化け物の口真似，例22は「～の次第をごろうじろ」，例23は現代でも用いる「細工は流々仕上げをごろう

じろ」の例である。これらの例は，「ごろうじる」にのみ見られる特徴といえ，この表現が堅い表現，古くささを持った表現という特徴を持っていたと推測することができる。

（例20）まづ此鴨をめしあがつて御覧じろ。（鳥屋ちゃぼ→中流以上たこ助）【B（香具師の口真似）】［『床』二編下344］

（例21）啌だと思ふなら，手を出して天窓を探つて御らうじろ。薩芋で拵へた角が額に有るで御座いト，一一名なのるといふ。（中流以上茶め→中流以上下手）【B（化け物の口真似）】［『七』四編中・下巻50］

（例22）口に孝行の次第を御覧じろッ，アア苦しい。（中流以上宙吉→中流以上旦那）【B】［『癖』四編367］

（例23）細工は流々仕上を御覧じろ。（中流以上安波太郎→中流町人眼七）【B（慣用的な表現）】［『八』第五編中之巻289］

次に聞き手の性別について見ると，「ごろうじろ」は，男性のみが用いていることから，性差を指摘することができる。また，男性同士の例では，次の例24のように，「ごっす」を用いる医者が使用している。「ごっす」は，湯沢（1954）が「医者・俳諧師・職人・遊び人などの口から出る語であって，一般の町の人は用いなかったようである。（P. 214）」と述べている。

（例24）それ御覧じろ俳諧が好だ。（医者→隠居）【B】［『風』前編25］[17]

命令形以外で見られた「ごぜす」を用いる人物（例19）と「『ございます』の転訛形を用いる」という点で共通している。同じように，前掲例22の話し手の宙吉は，歌舞伎や豊後節のセリフを真似する人物であり，共通した特徴をもつといえる。

このように，中流以上の人々における命令形「ごろうじろ」全16例中，慣用句的に用いる例や口上の口真似で用いる例が5例，「ごっす」「ごぜす」を使う人物が2例，歌舞伎や狂言好きの人物[18]が7例という特徴的な人物による使用が目立つ。

②下層の人々の使用　下層の人々の使用は，用例数が少ないため，今後用例数を増やして確認していく必要がある。以下，どのような例が見られたかを挙げる。

下層の人々の使用は，男性同士，女性同士の会話ともに，「見なせへ」や「ごろうじろ」の例が見られた。例25は，視覚的に＜見る＞の例，例26は，＜試みに～してみる＞の例である。いずれも下層町人女性おゑごと下層町人女性▲の会話である。

（例25）見なせへ，私一人と家内中と掛合ふはな。（下層町人おゑご→下層町人▲）【B】［『風』三編巻之下183］

（例26）〔おゑごのことが羨ましいという▲に対して，おゑごが自分の家の様子を述べて助言しているところ〕おめへの所でもさう仕て御覧じろ。（下層町人おゑご→下層町人▲）【B】［『風』三編巻之下184］

従って，下層の人々の使用は，中流以上の人々が互いに「ごろうじまし」を用いたり，女性同士では「ごろうじろ」の例が見られないという特徴とは異なっており，階層による違いを知ることがで

きる。

(2) 上→下のCの関係

Cで用いる場合は，中流以上の人々の使用に5例見られた。これらのうち4例は中流以上の町人古左衛門から下層町人あば民，中六に対して用いた例である。

（例27）御覧(ごらう)じろさま〳〵な芸者があるネ。（中流以上古左衛門→下層中六・あば民）【C】［『風』四編巻之下288］

この例27の話し手である古左衛門は，本文中「むかしかたぎの律儀(りちぎ)おやぢ」と説明されており，「律儀さ」と，「むかしかたぎ」という古くささを兼ね備えた人物である。また，歌舞伎の隈取の話をしていることから，歌舞伎について詳しい人物であるといえる。これらは，Bで見てきた特徴と一致している。ただし，この古左衛門は，同じ人間関係で「見なさい」も用いている。「ごろうじろ」と「見なさい」が似た敬意を表す表現として用いることができたといえる。

一方，上記例27のように男性同士のCでは，「見なさい」しか用いない人物の例（例28）も見られた。また，表1，2を見ると，B以下では「見なさい」が多く用いられている。このことから，Cの場合も「ごろうじろ」が特徴的な人物の使用に偏っており，Cにおいて一般的に用いられたのは「見なさる」系であったといえる。

（例28）心を信にしてよいといふ事は，まづ親を信心して見なさい。（中流以上晩右衛門→下層とび八たち）【C】［『風』四編巻之上242］

4．江戸後期から明治20年代までの変遷

次に江戸後期から明治20年代までの変遷について見ていく。江戸後期から明治20年代までの調査資料を年代順に並べた表が次の【表4】である[19]。表には，「ごろうじる」系と似た分布が見られた「ごらんなさる」系，「ごろうじる」系，「お見なさる」，「見なさる」，そして，江戸末期頃から見られ始め，明治20年頃に増加し始める尊敬表現形式「お（ご）～になる」である「ごらんになる」系の5表現を挙げている[20]。

この【表4】から，「ごろうじる」系が明治10年代にほとんど用いられなくなることがわかる。また，「ごろうじる」系の減少に反比例して「ごらんなさる」系が増加することもわかる。ただし，表す敬意に大きな変化は見られない。次の例29は，「ごろうじます」の例であるが，下女の元から主人に対して，尊敬動詞「いらっして」に接続した形で「ごろうじまし」を用いている。使用が少なくなったといっても，主従関係で用いており，高い敬意を表すことができていることがわかる。

（例29）まあ，一寸御二階へいらつして御覧(ごらう)じまし（下女元→主人柳之助）【A】［『多』95］

ここで，今まで見てきたことから，「ごろうじる」系が衰退する要因を考えると，次の2点を挙げることができる。

①単独の「ごろうじる」が堅い表現，古くささを持った表現という特徴を持っていたこと。

②命令形が「ごろうじろ」という形であること。命令形語尾「ろ」は，東国的特色を帯びており[21]，

表4　江戸後期から明治20年代までの＜見る＞の尊敬表現

	資料名	刊行年	ごろうじます	ごろうじる	ご覧なさいます	ご覧なさる	お見なさる	見なさる	ご覧になります	ご覧になる	合計
洒落本	遊子方言	1770	2								20
	甲駅新話	1775	2					4			
	浮世の四時	1784	1					2			
	角雞卵	1784						3			
	一目土堤	1788	1								
	古契三娼	1787	2								
	傾城買四十八手	1790	1								
	南品傀儡	1792	1								
	大通契語	1800						1			
小計			10〔50%〕	0	0	0	0	10〔50%〕	0	0	20
滑稽本	浮世風呂	1809	7	7	1	2		19			98
	浮世床	1812		6				5			
	四十八癖	1812	6	9				6			
	八笑人	1820	7	3		1		2			
	七偏人	1857		1		3		13			
小計			20〔20%〕	26〔27%〕	1〔1%〕	6〔6%〕	0	45〔46%〕	0	0	98
人情本	仮名文章娘節用	1831	3	1		1					69
	清談若緑	19C		3		4	2	2			
	春色梅児誉美	1832	1	2		1	3	1			
	春色恵の花	1835		2							
	春告鳥	1836	2		1	2		1			
	閑情末摘花	1839	3	1		4	2	3			
	春色恋廼染分解	1860	2	1	1	2	5	1			
	毬唄三人娘	1862		2		5	3	2			
小計			11〔16%〕	12〔17%〕	2〔3%〕	19〔28%〕	15〔22%〕	10〔14%〕	0	0	69
明治10年代	西洋道中膝栗毛	1870		3		3		19			54
	安愚楽鍋	1871		3	1			1			
	巷説児手柏	1879				1					
	怪談牡丹灯籠	1884	1			3		2			
	当世書生気質	1885	1			6		2			
	妹と背かゞみ	1886			1						
	雪中梅	1886			1	4				1	
小計			2〔4%〕	6〔11%〕	3〔6%〕	17〔31%〕	0	24〔44%〕	0	2〔4%〕	54
明治20年代	浮雲	1887		1		4					53
	花間鶯	1887				3		1	2		
	緑蓑談	1888			2	9		1	1	2	
	乙女心	1889				1	1				
	二人女房	1891			2	4					
	黒蜥蜴	1895			1						
	にごりえ	1895			1						
	五大堂	1896				3					
	多情多恨	1896	1	1	5	7					
小計			1〔2%〕	2〔4%〕	11〔21%〕	31〔58%〕	1〔2%〕	2〔4%〕	3〔6%〕	2〔4%〕	53
計			44	46	17	73	16	91	3	4	294

小計にある〔%〕は，各ジャンルの合計に対する割合を示している。これは，少数第一位を四捨五入した数値である。
用例を得られなかった資料は除いて示した。

当時の主流である「お～なさい」「～なさい」と比較すると古くさい表現であり①の特徴と重なる。

単独の「ごろうじろ」の持つ古くさいイメージの影響から「ごろうじます」もともに用いられなくなると，「ごらんなさいます」が「ごろうじます」にとってかわり，単独の「ごらんなさる」がその使用をより一般的なものとしたと考えられる。

5．まとめ

以上，江戸後期から明治20年代までの＜見る＞の尊敬表現についてみてきた。まとめると以下のようになる。

5.1　江戸後期における「ごろうじる」系の使用実態

江戸後期，＜見る＞の尊敬表現は，「ごろうじる」系が大きな勢力を持っている。そのうち，「ごろうじます」は，高い敬意を表す尊敬表現として一般的に用いられ，「ごらんなさいます」を凌ぐ勢いである。一方，単独の「ごろうじる」は，滑稽本までは多用されるが，人情本になると，中流以上の人々において，単独の「ごらんなさる」と同程度の勢力を持って使用されるようになる。ただし，「ごろうじる」は，命令形以外の場合，すべての階層においてB以上で用いるが，命令形の場合，中流以上の人々にCで用いる例が見られるという点が「ごらんなさる」と異なる。特に「ごろうじる」は，「ごろうじます」と比較すると，慣用的な表現や口上の口真似をする場合に用いたり，「ございます」の転訛形を用いる人物が使用したりするという偏りが見られる。この偏りは，「ごろうじる」に古くさい表現，堅い表現という性格を持たせており，次第に使用しなくなる要因の一つとしてはたらいたと考えられる。人情本において男性から女性に対しては「見なせへ」や通常語が，女性から男性に対しては「ごらんなさる」や「お見なさる」が用いられていることからも「ごろうじる」は特徴的な人物が使用する傾向を持ちその傾向を強めていったといえる。

5.2 「ごろうじる」系の変遷とその要因

「ごろうじる」系は，江戸後期までは使用が見られるが，明治10年代になるとその使用はほとんど見られなくなる。減少する要因としては，5．1でも述べたように，単独の「ごろうじる」が古くさい表現，堅い表現という特徴を持っていたこと，また，活用語尾「ろ」が尊敬表現の命令形語尾としては古い表現であったこと，江戸後期に大きな勢力を持っていた「お～なさる」形式に当てはまる「ごらんなさる」系の方が用いやすかったことが考えらえる。

注(1)「ごろうず」は「ごらんず（ご覧ず）」が変化した語である。

(2)　湯沢幸吉郎（1954）が「敬譲の意を添えるには，『見る』に『お……なさる』を附けるか，『御覧なさ（は）る』『ごろうじる』を用いる。(P.234)」と述べている。ただし，これらは高い敬意を表す尊敬表現であり，他にも「見なさる」「見さっし」等多様な表現がある。

(3)　ただし，山崎（1966）が「ごらんなさる」を「お～なさる」形式として扱っているか，敬語動詞として扱っ

ているかは不明である。本稿では，「お～なさる」形式として扱う。

⑷　小島俊夫（1974）の「後期江戸語（十九世紀前半，滑稽本・人情本）」の敬語体系表では，前者が「段階A」，後者が「段階B_1」「段階C_2」に属している。

⑸　なお，浅川哲也（2012）『春色恋廼染分解翻刻と総索引』（おうふう）では「ごろうず（御覧）」，稲垣正幸・山口豊（1983）『柳髪新話浮世床総索引』（武蔵野書院）では「ごらうじる（御覧）」が見出し語とされている。江戸語の段階では上一段活用の例が一般的になっているため，本稿では，「ごろうじ（ます・て）」のような例も「ごろうじる」に含めて扱う。

⑹　田中章夫（1973）は，「近世前期上方語の敬語」についてではあるが，「同じ表現形式を使っていても，右に述べたような性別や身分・階級によって，その敬語の度合いは，必ずしも同一ではない。（P.13）」と述べている。これは近世後期の江戸語においても当てはまると考えられる。

⑺　山崎（1966）は，「第一段階（最高敬語）」の「A晴のことば」と「B普通のことば」の区別は使用する階層に差があると説明している。しかし，「第二段階（普通敬語）」のそれは「丁寧な表現」か「気楽な表現」かの違いとしており，不明確な記述になっている。小松寿雄（1961）では，「概念図のように単純化した図表では両者の相違（山田注，階層による相違）はあまり響かない（P. 111）」と述べている。先行研究により，「概念図」が明らかにされていると考えられるため，本稿では＜見る＞の尊敬表現の詳しい使い分けを考察したい。

⑻　ただし，武士ことばを話す人物の例は除外する。

⑼　辻村（1968）は，「『浮世風呂』『浮世床』の敬語」について述べる中で，「現在は用いられなくなった「ごらんじる」「ごろうじる」「ござる」もあるが例は少なく（P. 241）」と述べている。ここでは，「尊敬動詞＋ます」の形で，＜見る＞の尊敬表現という観点から見たとき，「ごろうじます」が多用されているということである。

⑽　店の主人と客の例は，Bとして扱っている。ただし，呼称に「旦那」を用いていたり（山崎（1966）で「第一段階」に所属），対称代名詞「あなた」「おまへさん」（山崎（1966）で「第一段階」に所属）を用いていたりする等，Aと認められる例はAに分類しているため，ここの用例数には含まない。

⑾　例9は，見かけの主語は「半年」であるが，聞き手のおたこに対して敬意を表すために用いていると考え，Bに分類している。

⑿　小島（1974）では，「『やす』は，『ます』よりは，話し相手に対する敬意もひくく，そのもちいられる＜場＞も，せまくかぎられていたのであろう。（P.207）」と述べている。

⒀　単独の「ごろうじる」には，「ごろじる～ます」は含まないこととする。「ごろうじる～ます」の1例はAの使用であり（例2），「ごろうじます」に近い敬意を表しているためである。

⒁　Aで用いる例は芸妓にも見られたが，引用の中で使われていたため，考察の対象外とした。

⒂　この例17は，「ごろうじて」の形で聞き手に対して命令（依頼）する例ではあるが，「ごろうじてくださいまし」などの例を「ごろうじる～ます」として扱っているため，今回は「ごろうじて」を「ごろうじる」の「命令形以外」に含めて扱った。

⒃　前田勇（1974）『江戸語大事典』（講談社）に，「『ごぜす』は，『ごぜえす』の短呼。」と説明されている。「ごぜえす」は，「ござえます」の短呼であり，これは「ございます」の転訛形である。

⒄　この例は，『日本国語大辞典第二版』によると，命令形「ごろうじろ」の初出例となっている。

⒅　『八笑人』の登場人物は，茶番狂言をする人々であるため，この特徴ある人物に含めた。

⒆　階層や上下関係が不明の例も加えているため，【表1，2，3】と用例数は一致しない。

⒇　田中章夫（2001）は，「お（ご）～になる」形式は江戸末期から見られるが，「ごらんになる」「おいでになる」は，明治20年頃成立したと述べている。

㉑　小松（1973）では，「めさる」の命令形に見られる「めさろ」について感動助詞「ろ」なのか，命令語尾なのか，判定できかねると述べた上で，この「ろ」が関東で広く使われており，後期江戸語に伝わったと述べている。

○主な参考文献
・小島俊夫（1974）『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院
・小松寿雄（1961）「人情本の待遇表現」『国語と国文学』180
・小松寿雄（1973）「第 5 章　近代の敬語Ⅱ」『講座国語史　敬語史』大修館書店
・田中章夫（1973）「近世敬語の概観」『敬語講座 4　近世の敬語』明治書院
・田中章夫（2001）『近代日本語の文法と表現』明治書院
・辻村敏樹（1968）『敬語の史的研究』東京堂出版
・広瀬満希子（1998）「『花暦八笑人』における命令法について―命令の受益の指向性―」『鶴見日本文学』2
・山崎久之（1966）「江戸庶民語の待遇表現の体系（1）―三馬の作品を中心として―」『群馬大学教育学部紀要』16〔『続国語待遇表現体系の研究』1990 所収〕
・山田里奈（2012）「「いらっしゃる」系拡大の様相―江戸後期から明治 20 年代まで―」『早稲田日本語研究』21
・湯沢幸吉郎（1954）『江戸言葉の研究』明治書院〔増補版，1957〕

○調査対象資料
【洒落本】『跖婦人伝』泥郎子（1749），『遊子方言』田舎老人多田爺（1770），『甲駅新話』大田南畝（1775）―『新編日本古典文学全集』（以下『新編』）／『浮世の四時』南陀伽紫蘭（1784），『甲驛妓談角雞卵』月亭可笑（1784），『一目土堤』内新好（1788）―『洒落本大成』（以ｖ下『洒落本』）／『古契三娼』山東京伝（1787）『傾城買四十八手』山東京伝（1790）『新編』／『南品傀儡』青海舎主人（1792）『洒落本』／『傾城買二筋道』梅暮里谷峨（1798），『繁千話』山東京伝（1798）―『新編』／『大通契語』笹浦鈴成（1800），『商内神』十返舎一九（1802）―『洒落本』**【滑稽本】**『諢話浮世風呂』式亭三馬（1809 ～ 1813）『新日本古典文学大系』／『柳髪新話浮世床』式亭三馬（1812 ～ 1813）『新編』／『四十八癖』式亭三馬（1812 ～ 1818）『新潮日本古典集成』／『花暦八笑人』瀧亭鯉丈（1820 ～ 1849）岩波文庫／『妙竹林話七偏人』梅亭金鶏（1857 ～ 1863）講談社文庫**【人情本】**『仮名文章娘節用』曲山人（1831 ～ 34）（前編）鶴見人情本読書会（1998）『鶴見日本文学』2，（後編）鶴見人情本読書会（1999）『鶴見日本文学』3，（第三編）鶴見人情本読書会（2000）『鶴見日本文学』4／『清談若緑』曲山人（19 世紀）『帝国文庫』／『春色梅児誉美』為永春水（1832 ～ 1833）『日本古典文学大系』／『春色恵の花』為永春水（1835）『名著』／『春告鳥』（1836 ～ 1837）為永春水『新編』／『閑情末摘花』松亭金水（1839 ～ 1841）『名著』／＊『春色恋廼染分解』山々亭有人（1860 ～ 1862）浅川哲也（2012）『春色恋廼染分解　翻刻と総索引』（おうふう）／＊＊『毬唄三人娘』（初編～三編）松亭金水（1862 ～ 1865）浅川哲也『人文学報』443（首都大学東京），2011，（四編・五編）山々亭有人―浅川哲也『人文学報』458（首都大学東京），2012**【明治】**『萬国航海西洋道中膝栗毛』仮名垣魯文（1870 ～ 1872）〈明 3〉，『牛店雑談安愚楽鍋』仮名垣魯文（1871 ～ 1872）〈明 4〉―『明治文學全集』（以下『明治』）／『怪化百物語』高畠藍泉（1875）〈明 8〉『新日本古典文学大系明治編』（以下『明治編』）／『巷説児手柏』高畠藍泉（1879）〈明 12〉，『怪談牡丹灯籠』三遊亭円朝（1884）〈明 17〉『一読三歎当世書生気質』坪内逍遥（1885 ～ 1886）〈明 18〉，『新磨妹と背かゞみ』坪内逍遥（1886）〈明 19〉―『明治』／『雪中梅』末広鉄腸（1886）〈明 19〉『明治編』／『浮雲』二葉亭四迷（1887 ～ 1889）〈明 20〉，『花間鶯』末広鉄腸（1887）〈明 20〉／『緑蓑談』（前編・続編）須藤南翠（1888）〈明 21〉―『明治』／『細君』坪内逍遥（1889）〈明 22〉，『乙女心』石橋思案（1889）〈明 22〉―『明治』／『二人女房』尾崎紅葉（1891）〈明 24〉，『黒蜥蜴』巌谷小波（1895）〈明 28〉，『浅瀬の波』広津柳浪（1896）〈明 29〉―『明治編』／『五大堂』田沢稲舟（1896）〈明 29〉『明治』／『たけくらべ』樋口一葉（1895）〈明 28〉，『にごりえ』樋口一葉（1895）〈明 28〉，『十三夜』樋口一葉（1895）〈明 28〉―『明治編』／『多情多恨』尾崎紅葉（1896）〈明 29〉『紅葉全集』

○なお，「ごろうじる」系，「ごらんなさる」系，「お見なさる」系の該当箇所に関して近世のものについては，明治大学図書館所蔵の版本（＊付），早稲田大学図書館所蔵の版本（＊＊付），早稲田大学図書館の古典籍総合データベース（http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/）により確認した。

≪付記≫

本稿は2011年12月10日に行われた早稲田大学国語教育学会の学生会員研究発表会での口頭発表の内容を修正したものです。ご教示くださった方々に心より御礼申し上げます。